

娘の悦子さんが、息が止まったばかりのナミはあちゃん(89)の手を握った。悦子さんは泣いた。そして一言、振り絞った。「おばあちゃん」。それから30、40秒後、ナミはあちゃんは再び息を吐き、吸い始めた。悦子さんは両の手ではあちゃんの手をしっかりと握り直し、言った。「おりがとう。おばあちゃん…もうええんよ。長生きしてくれて、ありがとねえ」。ナミはあちゃんは、この世の空気を大きく最後に吸い込み、呼吸を終えた。



國森 康弘

くにもり・やすひろ 写真家、ジャーナリスト。昭和49年、神戸市生まれ。京都大修士課程修了。神戸新聞社記者を経て独立。イラクやカンボジアなど紛争地や経済貧困地域で取材を重ね、滋賀県内で看取りや在宅医療の撮影に力を入れている。新書「家族を看取る」(平凡社)、写真集「3・11 メルトダウン」(凱風社、共著)など。

看取りの写真絵本

幸せな生き様をそのままに



最期を迎えようとするナミはあちゃんの枕元には、ひ孫たちが集まった。滋賀県東近江市君ヶ畑

そこでは、死と隣り合わせの状況で一日一日を生き抜こうとする生命力あふれる子どもたちに出会うと同時に、天寿をまっとうできない、家族が死に目にあえない、「冷たい死」を目の当たりにした。自爆攻撃に巻き込まれ、焼け焦げた遺体。爆発現場に残された少女たちの肉片。栄養失調で息絶える子ども。駆け付け、絶望し、泣き叫ぶ家族の姿もあった。シャッターを押す指が重かった。押せないこともあった。

人の致死率は100%。「どうせ死ぬなら、こんな死に方がしたい」と思えるような、あたたかく、幸せな「旅立ち」を撮りたいと、いつしか思うようになった。

のほとばしり、充足感、温かみのようなものが充満し、すっかり引き込まれてしまっていたからだ。

しばらくして、気がついた。ナミはあちゃんの目から涙がこぼれていたのだ。それを見て悦子さんは「これでよかったんやね」と涙ながらに、笑った。

滋賀県東近江市の東端、君ヶ畑という集落の住み慣れた自宅で最期を迎えることは、認知症を抱えながらも一人暮らしを続けたナミはあちゃんの意味だった。子を育て、夫を見

送り、ご近所さんで行き交いした自宅で、死ぬ。

最晩年、動かなくなってきた身案じた悦子さん宅に一時引き取られたものの、意識がもうろうとする中でも、「君ヶ畑」という言葉だけに強く反応した。「帰りたいの?」と聞くと、何度も「うん、うん」と答えた。ばあちゃんは君ヶ畑に帰ってきた。そして家族、親族、知人が別れに訪れる数日間を過ごし、息を引き取った。

自分の望む場所で、大切な人たちや医療・介護の専門職らに見守られ

ながら、天寿をまっとうする「あたかかい旅立ち」の写真撮影を重ねている。そして、写真絵本シリーズ「いのちつづみ」とりびと(全4巻、農文協)として出版。ある意味でその対極にある死を見続けてきたことが、その背景にあるのかもしれない。

神戸新聞記者だった平成15年、イラク戦争を現場取材するために独立した。以後、イラクやソマリア、スーダンなどの紛争地や経済貧困地域を歩いた。

そんな折、東近江市にある水源寺診療所の花戸貴司医師ら専門職との出会いがあった。寝たきりでも、認知症でも、一人暮らしでも、ガン末期でも、「大丈夫」。本人が望む場での晩年を支えていた。医師、看護師、介護職、薬剤師、ケアマネジャー、保健師らが輪になって、家族やご近所さんも加わって、毎日のように代わる代わる顔を出し、寄り添う。じいちゃん、ばあちゃんの手を握り、話しかけ、看取る子どもたちもいた。写真絵本にしたのは、子どもにも触れてほしかったから。旅立った人たちの顔は穏やかだった。そして、残された家族の表情もあたたかかった。「この美しいありのままの姿を、この幸せなき様を、最後まで撮ってやってくれたい」と言われた。ここでシャッターを押せないのはつらすぎる死だから、ではなかった。